

〈指導教員推薦文〉

人間福祉学部 准教授 池 埜 聡

渡邊 真央 「外傷体験を起因とする生存者罪悪感：～生存者罪悪感の概念的枠組みと手記・事例分析によるトラウマ反応への包括的理解の試み」

推薦理由

渡邊真央氏の卒業論文は、外傷性ストレス (traumatic stress) を受けた人々のストレス対処過程で表出される「生存者罪悪感」に着目し、その理論的枠組みを批判的文献レビュー法及び質的分析法によって高めた貴重な研究論文として位置づけられる。

生存者罪悪感、危機状況を経験した人々 (犯罪被害者、災害被災者、事故被害者、被虐待経験者など) に広く見られる強い自責感情を伴う反応である。一方、その発生メカニズムについては、十分な研究がなされていない。特に日本の精神保健、精神医学、心理学領域では、生存者罪悪感の理論的・実証的研究は管見の限り、見当らない。渡邊論文は、その詳細な文献研究、概念整理、そして深い事例分析をもとに、卒業論文という枠組みを越え、今後のトラウマ被害者のストレス対処過程及び支援方法について十分な示唆を与えるものであり、学術的にも貴重な理論研究といえる。

本論文の卓越している点は、以下の通りである：1) 生存者罪悪感について、ソーシャルワークのみならず、認知心理学、精神医学、実存心理学等の知見から幅広くレビューし、外傷性ストレスのタイプとの関連性から独創的な概念整理を達成している、2) 理論研究に基づき、詳細なケーススタディー法による質的分析を通じて生存者罪悪感の実態について、臨床例をもとに明らかにしている、3) 上記の理論研究と質的分析結果を相互往復的に分析し、ソーシャルワーク実践への示唆を導き出し、ソーシャルワーク研究論文としての高い精度を確保している。

文献レビューの詳細さ、概念整理の周到さ、深い質的分析、そして実践への貢献といった側面は、渡邊氏の個人的体験、すなわち2001年6月8日大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件時に、附属池田中学校の生徒として同じキャンパスに居合わせた体験に由来している。渡邊氏は、論文の最後に「おわりに」と題して以下のように記述している。

(前略) 学生生活が最後の今年、今年行かなかったら多分もうこれからも行かないんじゃないかと思ひ、事件後初めて、事件のあったその日に小学校を訪れることにしたのだ。

「祈りと誓いの塔」には亡くなった子どもたちの数だけ、8つのベルがある。私はそれを目の前に、呆然と立ち尽くすしかなかった。8人もの命が奪われたなんて。そしてその8人とかかわるたくさんの方々が悲しみにくれているんだ…。

私は何も言っておげることができなかった。本当に、なんでこんな事件が起こってしまったのか…。うずくまっていた疑問がまたよみがえった。

「ごめんね・・・」

このとき、亡くなった子どもたちに対して、私がなんとか自分の中から絞り出すことのできた唯一の言葉だった。

よくよく考えてみると、この「ごめんね・・・」が、何の謝罪なのか、どこから生まれてきた申し訳なきなのか、よくわからなかった。事件から7年が経過した今になって、自分の中にあってふと出てきたものが、悲しみ、同情、犯人への怒りよりも謝罪の言葉、つまり罪悪感であったことに私は驚いた。

全くの第三者よりは、少しだけ事件の近くにいた自分が、事件に対して、被害者に対して、罪悪感を抱いている…。なんとなくもやもやとしていた思いに、このとき初めて気がついた。(中略)

私の場合の様に、客観的に見ると全く関係ないトラウマ体験がリンクして、それが罪悪感を喚起しているということは、傍から見ると不合理で理解しがたいことではないだろうか。このように、生存者罪悪感を抱えている人にとって問題だと感じられることの一つは、実際に“不合理で理解しがたい”から、周りの人に理解されないこと。もう一つは、“不合理で理解しがたい”と本人が分かっている部分があるから、その思いをなかなか語れないということ。そして、罪悪感自体は、普通に生活していれば見た目に分かるものでないから、言葉による語りがなければ、周りの人はこの苦しみに気づくこと自体が難しいのではないかということ。(中略)

事件それ自体とそんなにも深い関係でない私も、“異様な”苦しみを感じていたことがある。さまざまな外傷体験に遭遇した方、遺族の方々が、如何ほどの苦難を抱えておられるのかと思うと胸が痛い。

でも、私はこの“異様な苦しみ”を経験したあと、命の大切さ、人の大切さ、自分の大切さ、心の大切さ、今という時間の大切さ、人生において苦しむ・悩むといった経験ができること自体のありがたさ、人の痛みを理解しようとする事、自分にできることはなにか考えること…、今まで見過ごしてきたたくさん大切なことに、徐々に気づけるようになったと思う。(後略)

事件から8年が経過し、この事件と自分自身の関係を見直したい、社会福祉学科で、そしてゼミで学んだことを統合し、被害者のために、そしてこれから人生を歩んでいくためにこの出来事に向き合いたい。本論文は渡邊氏の真摯な思いに根ざしている。信念に基づき、夏休みも返上で文献に向き合われ、学術的にも貴重な卒業論文を完成された渡邊氏の努力に心から敬意を表したい。

(渡邊氏の卒業論文は100ページ、11万字を超える大作であり、本稿ではその要約版として一部が掲載されている旨、ご了承ください)。